

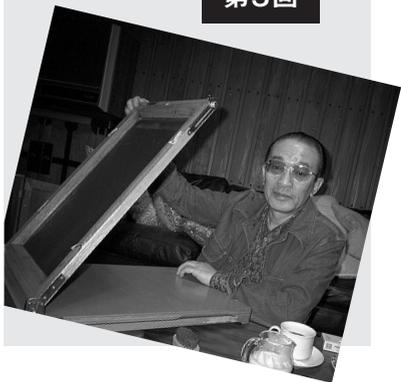


最後の映画俳優 佐藤慶がいた時代

猫とガリ版

ルポライター
鈴木義昭

第3回



大河ドラマ『太閤記』の明智光秀

時にさしかかった軍勢の先頭で武将が悩んでいる。家来たちは将の心のうちを気遣いながら、思いを叶えさせる道を残して断を仰ぐ。やがて、武将は逡巡を経て全軍に号令する、「敵は本能寺にあり」と――。

武将の名は、明智光秀。本能寺にあった主君織田信長を討ち、天下人となる勝利を得るが、すぐに毛利軍との戦いから取って返した豊臣秀吉に敗れ、歴史から姿を消した悲運の戦国武将である。

明智光秀を演じているのは、佐藤慶。一九六五年に

一年間にわたって放送されたNHK大河ドラマ『太閤記』の一シーンだ。国民的番組として今日まで続く「大河ドラマ」の礎を築き、それまでにない時代劇のスタイルを提示した『太閤記』は、同時に俳優・佐藤慶の名を日本中津々浦々の茶の間に知らしめたのだった。特にこの第四十二回「本能寺」は、織田信長役の高橋幸治の人気から「信長を殺さないで」という助命嘆願の投書まで来て話題になっている。

昔で言う「テレビっ子」の言葉通りの子供だった自分も、母親や家族と毎週欠かさずこの『太閤記』を観ていた。佐藤慶という俳優を、僕が意識したのは、この時が初めてだ。毎週日曜夜八時、テレビの前にかじ

りついた。大河ドラマが人気番組となるきっかけを作ったのが『太閤記』だが、当時放送された「大河ドラマ」は、今では映像のほとんどが保存されていない。ビデオテープが高価で、その後の他の収録に使い回しされたためである。『太閤記』で唯一公式に現存が確認されているのは、この回のみらしい。慶さんの遺品の中に、この回のVHSビデオがあり、息子の順さんからお借りして拝見することができた。明智光秀にも佐藤慶にも、強く影響を受けたことが昨日のことにように想い出された。

秀吉役の主演は新国劇の無名俳優・緒方拳、後に日本映画界を席卷する名優も、売り出したのはこの時からだ。演出の吉田直哉は、日本人が慣れ親しんだ映画や舞台の時代劇の伝統的手法と違う斬新な切り口を全篇に展開した。白黒放送の時代だが、セットとロケを巧みに交錯させたシーンは、ドキュメンタリーのような臨場感のある映像をも生み出していた。自分の肉体と上昇志向だけを武器に駆け上っていく緒方拳の秀吉に対し、苦悩と葛藤に苛まれながら破綻する光秀を内面から深く演じた佐藤慶は、評論家や関係者だけでなく一般視聴者にも共感を呼んだのだ。



大河ドラマ『太閤記』の名場面。主君思いで文武両道の知識人だった明智光秀（佐藤慶）だが、主君織田信長（高橋幸治）に疎まれ、深く静かに反旗の炎を胸に燃やすこととなる（佐藤慶さん作成の「スクラップ帖」より）。